論　文

2回のロールシャッハ・テストを通して買い物依存者の人格特性を考察する

冨　田　　愛

〔抄　録〕

物質使用障害者の治療において，生きる上での問題の解消にアディクションを使用している場合，治療の際に人格特性を理解する必要性があると指摘されている。筆者は，買い物依存者に対しても同様に人格特性の理解は重要ではないかと考え，本稿では1事例の2回のロールシャッハ法を比較検討した。その結果，対象との融合への希求，それゆえ生じる呑み込まれる不安が問題として挙げられた。また，その防衛として部分化が使われ，同性愛などが生じた。しかし，同性愛的関係が揺らぐと，その不安定さから逃れるために，目の前の部分的な対象との融合関係へ没入した。本事例の問題の本質は,「何かに依存する」というような対象との分離を前提にしての対象関係にあるのではなく，分離以前の溶け込み，一体化，呑み込まれるような世界に生きている点にあると考えられた。本研究から，このような人格構造の力動的特徴が買い物依存者にある可能性が示唆された。

キーワード：買い物依存，ロールシャッハ・テスト，再発，対象との融合

Ⅰ．問題と目的

アディクションという概念はAmerican Psychiatric Association（2013）によって物質関連および嗜癖障害と位置づけられた。それまでの“依存症”という言葉では,「狭い意味でのアルコールや薬物への依存というニュアンスが強く，ギャンブルやインターネット，買い物，性行動，摂食障害，自傷行為など，多様な“行動の依存症”も含めた依存症的行動全般の心理について語るうえでは，“アディクション（嗜癖）”という総称の方が適切な言葉」（小林，2016）といえる。また「さまざまな嗜癖行動（たとえば，セックス依存，運動依存，買い物依存）が，今後精神疾患として認められる可能性を秘めている」（和久田，2014）。

物質使用障害はDSM-5から「依存と乱用が統一され，（略）診断が物質使用に関連した行動

障害に基づくようになった」（清島・古賀，2016）ことにより，「個人のパーソナリティの側面や経験的な側面といった個人のあり方はより一層排除されることになった」（清島・古賀，2016）といえる。これは行動のアディクションにも同じことがいえ，「DSM-5の診断基準に入るとなれば，従来の依存の概念よりも幅が広いものになる」（橋本，2019）ことが予想される。

アディクションは，小林（2016）によれば「遺伝的な“発症しやすさ”の影響を受けつつ，人間関係の病として発症し，人間関係の中で悪化したり回復したりする」とされる。またKhantzian & Albanese（2008）は「依存症の本質は，脳内報酬系を介した快感の追求ではなく，感情的苦痛の緩和にある」という自己治療仮説を唱え，「単に快楽を追求するためではなく，各個人が抱える“生きる上での困難な問題”を解決するために，それぞれのニーズにマッチした物質を使用している」と考察している。一方で，同じアディクションの中でも「行動の依存症が生じる要因に関する研究はほとんどなされていない」（船橋ら，2011）。依存症からの回復についても，物質依存に対してはハームリダクションや心理社会的治療など，エビデンスを基礎とした治療方針が示されている一方で[(1)]，「行動のアディクションに心理社会的治療が有効であると証明されているわけではない。しかし，それは研究が不十分であるのが主な理由であり，基本的に治療指針の応用は可能である」（橋本，2019）と考えられる。廣中（2013）によれば「買い物依存症の人はうつ病，不安，物質乱用，摂食障害などの問題を抱えていることが多い」とされ，このことからも行動の依存症者も物質使用障害者のように感情的苦痛を抱えていることが推測される。

既述した通りDSM-5では個人のパーソナリティの側面が見えにくいため，アディクションからの回復を支援する際に，それぞれに生きる上での困難な問題を抱えた者に対して，「教育的なアプローチや認知的なアプローチのみでは不十分な可能性が考えられ，（略）個人の特性やパーソナリティといった個別的な理解の必要性がある」（清島・古賀，2016）と考えられる。これらのことから筆者は買い物依存者にも心理社会的治療は有効で，回復を支援していく上でロールシャッハ・テスト（以下，ロ・テスト）を通して人格特性を理解しておくことが必要であると考えた。本稿では，「買い物依存になった原因を明らかにしたい」と筆者が勤務する依存症専門施設のプログラム（3ヵ月）を受けることを希望し，その後再発した1事例を取り上げる。1回目のロ・テストはプログラム開始前に臨床像の適切な把握と理解のために筆者が実施した。さらにプログラム修了後，今度は自身の言動が良いのか悪いのか「答え合わせをしたい」とカウンセリングを希望し，約1年間継続した。その途中で再発し，自ら客観的に現状を見たいとロ・テストを希望したため，再度筆者が実施した。被検者が置かれた状況の違う中でロ・テストを実施したため，その2回のロ・テスト反応を比較考察することで，買い物依存の病理の様態や病理発生のメカニズムを明らかにすることを目的とする。

また，本事例の被検者はセクシュアル・マイノリティ（ゲイ[(2)]）であるため，買い物依存とゲイという2つの特徴を同時に有している。そのため，この2つの絡み合いへの理解を与えて

くれる可能性がある。さらに，上記のように状況の異なる場面で2回のロ・テストを実施することができたため，その2回の比較考察から買い物依存とゲイのパーソナリティ特性がどのように結びついているのかを理解することを試みる。

Ⅱ．事例の概要

Aさん，40代男性（ゲイ）

1. 主訴

買い物依存

2. 診断名（DSM-5 [3]）

社会不安障害，抑うつ障害

3. 家族歴

実父母と同胞2人の4人家族。両親は不仲で，Aと姉は母親の愚痴を聞かされて育った。Aは母親を不憫に思い，養護教諭に泣きながら事情を聞いてもらっていた。父親は家にいないことが多く，家にいる時も些細なことでイライラしやすかった。母親はAが28歳の時に病死した。母親の死後，父親は再婚し，現在は父親と継母とAの3人で暮らしている。姉は自立し，近くで別居している。姉との関係は良好で，何でも相談している。

4. 生育歴・問題歴

Aは小学校の頃からゲイを自覚し，友人からは「おかま」といじめられていた。小学5年生頃から母親の財布からお金を盗り，友人が珍しがる文房具を買って注目を集めることに喜びを覚えていた。高校卒業後，就職。仕事は対人トラブルが原因で7回転職を繰り返した。20歳頃から買い物により毎月20万円以上の支払いがあり，そのために働き続けた。

Aは母親が亡くなった際，自分の生きづらさの元凶は母親の存在だったと気づいたという。30代前半の時に読んだ本から，自分は依存症ではないかと疑った。当時，買い物依存を専門に扱う医療機関がなかったため，アルコール依存症専門のクリニックに受診した。そこで社会不安障害と診断された。

X－3年にDebtors Anonymous（＝買い物依存の人のself help group。以下，DA）ができ，通い出した。しかし買い物は止められず，借金は300万円まで膨れ上がった。X－2年に債務整理を終え，その後クリニックで抑うつ障害と診断されたため，それを理由に会社を退職した。

X年1月に依存症のリハビリプログラムを受けたいと筆者が勤務する施設に来られた。プログラム修了後，「（自分の言動の）答え合わせをしたい」「他人の顔色や評価を気にしないで生きたい」などと述べ，筆者にカウンセリングを希望してきた。その時点では，約半年間再発していなかった。隔週1回，50分のカウンセリングを開始した。

X年11月，友人からもらったプレゼントを持っていた際，DAのスポンサー [4]（ゲイ）から

再発を疑われた。これに対し，Ａは「自分の気持ちを分かってもらえない」と反発し，父親に頭金を出してもらって新たにローンを組んだ。

5. 臨床像および受検態度

Ａは初対面の時から明るく人懐っこいという印象で，一見社会不安障害の印象は受けなかった。ロ・テストを実施した際の態度は，１回目・２回目ともにＡ自身がパーソナリティ理解を望んでいたので，積極的だった。

6. 倫理的配慮

治療的関係が終わった時点で，ロ・テスト結果から考察した買い物依存の心理や，事例概要を個人が特定されない形で学会誌に投稿することを説明し，同意を得た。

Ⅲ．２回のロ・テストの結果および心理療法の経過

スコアリングは片口法（1987）に準拠した。１回目（Ｘ年１月）と２回目（Ｘ＋１年１月）のsummary scoring tableを表１に示した。プロトコルは表２に示した。

表１　summary scoring table（1回目→２回目）

R	33 → 41	W：D	5:18 → 4:22	M：FM	2:11 → 4:5
Rej	0 → 0	W%	15% → 10%	F% / ΣF%	55→59 / 97→95
TT	6'16" → 10'04"	Dd%	30% → 37%	F+% / ΣF+%	39→42 / 63→51
RT (Av)	37.6" → 1'00"	S%	0 % → 0 %	R+%	61% → 49%
R1T (Av)	7.3" → 13.8"	W：M	5:2 → 4:4	H%	21% → 27%
R1T (Av.N.C)	6.6" → 16.8"	M：ΣC	2:1.75 → 4:2.5	A%	52% → 41%
R1T (Av.C.C)	8 " → 10.8"	FM+m：Fc+c+C'	11:1 → 6:2.5	At%	3 % → 2 %
most delayed card	Ⅵ 13 "→ Ⅸ 15"	Ⅷ+Ⅸ+Ⅹ / R	36% → 27%	P	4 → 2
most liked card	Ⅹ → Ⅷ	FC：CF + C	1.5:1 → 1:2	CR	7 → 7
most disliked card	Ⅵ → Ⅳ	FC+CF+C：Fc+c+C'	2.5:1 → 3:2.5	DR	5 → 9
				Sex	4 → 7

表２　プロトコル（1回目→２回目）

	1回目			2回目	
Ⅰ	①3″ ∧	コウモリ。＜inq＞黒いシルエットで羽		58″	はい(図版を伏せた)＜教えてください＞
		(D2)のように広がってる。		①1'03″∧	カラスの横顔。＜inq＞帽子(d1)を被ってる感じ。色味とか。
		W, FM±, FC', (A), (P)			D3, FC'±, (Ad), Cg
	②10″ ∧	目が(4つ)あるから変わった仮面。		②1'12″∧	狐の顔(下の2つのSとその周辺)が正面。＜inq＞もう1匹(上の2つ
		W, S, F∓, Mask			のSとその周辺)乗っかってるように見えます。
	③19″ ∧	鳥。＜inq＞足(d3)を伸ばして踏ん反り			dr, S, FM±, Ad
		返ってる。		③1'27″∧	小動物の横顔。＜inq＞口をバーッと開けてる。
		dr(D3＋d3), FM±, A			d3, FM±, Ad
				④1'39″∧	植物の胞子。
					dr(d2より下にある突起部分), F∓, Pl
				⑤1'48″∧	恐竜の横顔。
					di(d2とd4の間の内部), S, F∓, (Ad)
	40″			2'00″	

Ⅱ	①7″ ∧	蝶々。＜inq＞パッて開いてる感じ。		①8″∧	goodの手。＜inq＞親指が出て見えます。
					D3, F±, Hd
		D2, FM±, A		②18″∧	手を合わせている。
	②9″ ∧	女性器。			d1, M±, Hd
		D2, F∓, Sex		③26″∧	女性器とアゲハ。＜inq＞女性器。ピンクだから余計。
	③18″ ∧	祈る姿。＜inq＞アフリカとか頭に飾りをつけてる人種。			D2, CF∓, Cp, Sex
				→④∧	＜inq＞(アゲハは)後ろから、上から止まっているところを見た感じ。
		2D, M±, H, Cg, P			
					D2, FK±, A
				⑤36″∧	イースター島のモアイ像。＜inq＞横顔
					dr(D1の動物の耳に見られる部分), F±, (Hd)
				⑥53″∧	忍者が2人手を合わせてる感じ。＜inq＞黒子の格好。頭下げて首から上は(見え)ない感じ。
					D1, M±, FC', Hd, Cg
	35″			1'06″	
Ⅲ	①5″ ∧	襟元。＜inq＞首元。シャツのカラー(D4とD5の間の空白部)、蝶ネクタイ(D3)。		①12″∧	竜の落とし子。
					D1, F∓, A
				②19″∧	上半身、女性の横の姿。
		dr, S, F∓, Hd, Cg			dr(D6の一部), F±, Hd
	②26″ ∧	ダチョウ。＜inq＞首が長い。		③30″∧	蝶ネクタイ(D3)。全体が襟元に見えてきた。
		D1, F±, A			dr(D2＋D3＋D5), S, F∓, Cg
	③34″ ∧	蟹。＜inq＞食べてるところ。		④36″∧	骨盤。＜inq＞色の薄いところが薄い骨、濃いところが骨盤の厚いところ。
		dr(D4＋D5), FM±, A			
	→④∧	お尻をくの字にしてる鳥。＜inq＞向き合ってる。			D5, cF∓, Atb
				⑤43″∧	蟹の手。＜inq＞先が割れてるところが節に見えた。
		D2, FM±, A			D4, F±, Ad
	37″			57″	
Ⅳ	①3″ ∧	蛙。＜inq＞上から見た姿。足(D2)曲げて。		①2″∧	蛙を上から見た感じ。＜inq＞ジャンプしようとしてるところ。
		W, FM±, FK, A			W, FM±, FK, Ad
	②12″ ∧	拳。＜inq＞こうしてる(人先指と小指だけ出してる)。		②12″∧	面長の猿の顔。 ＜inq＞耳、口。
					di(d2とD3の間の内部), F±, Ad
		dr(D1の下部), F±, Hd		③29″∧	男性の横顔。＜inq＞鼻、あご(d3)、髪の毛。
					dr(D2よりも大きくD3よりも小さい領域), F±, Hd
	24″			35″	
Ⅴ	①8″ ∧	後ろから見たコウモリ。＜inq＞羽(D1)開いて、頭が少し前にいるよう。		①4″∧	コウモリ。＜inq＞羽(D1)、耳。
					W, F±, A, P
		W, FM±, FK, A, P		②13″∧	横から見たワニの口。
	②10″ ∧	蝶々。＜inq＞羽の下の部分(d3)。			d2, F±, Ad
		dr(d3とその周辺), F±, Ad		③22″∧	アゲハの下の部分だけ。上から見た感じ。
	③12″ ∧	魔女がマント(D1)広げてる感じ。＜inq＞後ろ姿。色が黒だから(魔女)。ドロンジョ様が被ってるマスク(d1)みたい。			d3, FK±, Ad
				④28″∧	人の足。内股。
					d3, F±, Hd
		W, M±, FC', (H), Cg, Mask			
	④30″ ∧	ダンサーの足。＜inq＞内股。ブルマの長いやつ(履いてる)。			
		d3, F±, Hd, Cg			
	35″			45″	
Ⅵ	①13″ ∧	インディアン。＜inq＞あご(d1)の長い人。横顔。飾り(d4)。		①5″∧	男性器(D3とD3の間)。男性器の中に女性器(D2の下3分の1)の断面図も見えちゃう。
		dr(D3の上3分の2), F±, Hd, Cg			dr, F−, Sex, Ats
	②19″ ∧	トーテムポール。		②18″∧	男性器。トーテムポールにも見える。＜inq＞男性器。
		D1, F∓, Arch			d2, F∓, Sex
	③32″ ∧	携帯電話の基地局。		→③∧	＜inq＞トーテムポールにも見える。
		D1, F∓, Arch			D1, F∓, Arch
	→④∧	男性器。		→④∧	女性器。
		dr(D2の上3分の2), F∓, Sex			di(D5の中心部), F−, Sex
	42″			55″	
Ⅶ	①6″ ∧	ティンカーベル。＜inq＞猫背っぽいところが高飛車な性格が出てる。		①10″∧	女性の横顔。＜inq＞腕横に出してる感じ。
					D2, M±, Hd
		2D, F±, (H), (P)		②24″∧	女性器(d1)。＜inq＞足広げちゃってる感じ。
					dr(d1とその周辺), M∓, Sex, Hd
				③35″∧	横から見た指。爪。
					d2, F±, Hd
	34″			49″	

Ⅷ	①8″ ∧	カメレオン。＜inq＞目、足、尻尾。		①11″∧	ハンガー(D3)。ハンガーにかかったドレス。＜inq＞ ビスチェ(D2からD5を除いた部分)
		D1, F±, A, P			
	②32″ ∧	蛙。＜inq＞上から見た感じ。足を伸ばしてて。色はグリーンのような。			W, Fm∓, Cg, Obj
				②14″∧	カメレオン(D1)が木(D6)にしがみついてる感じ。＜inq＞(木は)緑の部分が。
		D3, FM±, FC, FK, A			
	→③∧	おっぱい。女性器。			D, FM∓, CF, A, Pl, P
		dr(D5の下縁の3つのふくらみ部分), F−, Sex		③19″∧	女性器。
					dr(D5の下縁の中心部), F∓, Sex
				④25″∧	カメレオンの目。＜inq＞上から見た感じ。
					dr(D5の下縁のふくらみ部分), FK∓, Ad
	46″			52″	
Ⅸ	①9″ ∧	桃。＜inq＞色から。		①15″∧	マジンガーZの顔に見えます。
		D7, FC∓, Food			W, S, F−, (Hd)
	②25″ ∧	女性器。		②44″∧	やっぱり女性器に見えるな。
		dr(D2の中心部), F∓, Sex			dr(D2の中心部), F∓, Sex
	37″			55″	
Ⅹ	①11″ ∧	口開けてる犬。		①8″∧	微生物。海で浮遊してる。＜inq＞色から。
		dr(D1の一部), S, FM±, Ad			D1, FM∓, CF, A
	②13″ ∧	背伸びしてるライオン。＜inq＞頭、前足、後ろ足、尻尾。		②17″∧	エビとか蟹の顔。＜inq＞目(D6とD13の間の空白部)、口(D5)。
		D2, FM±, A			dr(D4＋D5を含む空白部), S, F∓, Ad
	③15″ ∨	斜め後ろから見た龍。		③28″∧	竜の落とし子。
		d1, F∓, (A)			D6, F∓, A
	④20″ ＜	走ってるところを後ろから見た鹿。角。		④37″∧	ひげ。
		D9, FM±, A			D3, F∓, Hd
	⑤27″ ∧	竜の落とし子。		⑤51″∧	ヒールの靴。＜inq＞ピンクだから。
		D6, F∓, A			D6, FC±, Cg
	⑥35″ ∧	大腸の一部。＜inq＞色が。			
		D6, CF∓, Ats			
	→⑦∧	変な生き物に見える。			
		D13, F∓, (A)			
	46″			1’10″	
	MLC：Ⅹ	色がたくさんある。心が動いた。		MLC：Ⅷ	コンパクトにまとまっていて色が鮮やかだから。Ⅸの緑よりⅧの緑の方が断然良い。
	MDC：Ⅵ	気持ち悪い。男のオナニーグッズの断面図みたい。		MDC：Ⅳ	そもそもこういった形が好きじゃない。
	MIC：Ⅶ	おばちゃんのヘアースタイルでもいける。		MIC：Ⅱ	女性らしかった(図版の赤の部分)けど、質素な人だった。
	FIC：Ⅰ	黒一色。一番男っぽい、強いとか怖いとか。		FIC：Ⅰ	仮面にも見えるから。あんまりしゃべらない、真意が分からない父親のイメージ。
	SIC：Ⅹ	人から見られてる自分のキャラクターは華やか。		SIC：Ⅹ	とっ散らかってる。でも統一感はある。Ⅲの赤よりⅩの赤の方が良い。

1．1回目のロ・テストの量的分析および継列分析

量的分析から，片口（1987）によれば「R ＝ 20 ～ 45 が平均域」とされるので，R ＝ 33 は平均的である程度の自己表現の豊かさを示しているといえる。

「W％の平均は 39％，Dd％の平均は 8.6％」（片口，1987）であり，W％＝ 15％は低く，Dd％＝ 30％は高いといえる。「高い Dd％は強迫神経症にみられることが多く，それは完全癖などにより細部分に拘泥するためと考えられる」（片口，1987）ことから，部分的に関わりを持とうとする傾向が強いと推測される。

次に「F ＋％の平均は 78.8％, ΣF ＋％の平均は 77.6％」（片口, 1987）であり, F ＋％＝ 39％, ΣF ＋％＝ 63％，R ＋％＝ 61％は低いといえるし，F ＋％だけが著しく低い（F ±：F ∓＝ 7：11）。上芝（2007）によれば「形態反応だけの形態水準と，形態を主要因に含んだ他の反応の形態水準とのあいだに大きい差がある場合（略），もし後者が前者にくらべて非常に高いような場合は，あまり自我関与しない場合よりもした場合の方が認知がシャープだというわけで，自己中心的な像が浮かびあがってくる」とされることから，自己中心的な認知傾向が推測される。ま

た，小野（1991）によれば「形態水準の低いFが多い場合は，自己統制が弱かったり，現実を曲解したり，情緒が混乱していることを示す」とされることから，自己統制力の弱さや情緒の混乱が推測される。

M:FM = 2:11とFMが非常に多い。「FMは動物の運動の認知，共感を意味するから，（略）原始的な衝動や欲求の存在や認知を反映するものとみられる。MよりもFMやmが多いプロトコールは，非常に不安定」（上芝，2007）とされることから，原始的な衝動の強さから内的な統制が上手くいかず不安定な状態になりやすいことが窺える。しかし，感じられている運動は弱いものが多く（Ⅰ図③「足を伸ばして」，Ⅲ図④「お尻をくの字にしてる」，Ⅳ図①「足曲げて」，Ⅷ図②「足を伸ばして」，Ⅹ図②「背伸びしてる」），原始的な衝動の中身はそれほど激しいものではないと考えられる。

また「Ⅷ，Ⅸ，Ⅹ図における反応数は一般の人は30～40%，色彩反応の総数は統計によると40のRに対し6個以上が標準」（本明，1959）であり，Ⅷ＋Ⅸ＋Ⅹ/R = 36%は平均的で，FC:CF + C = 1.5：1は少ない。上芝（2007）によれば「Ⅷ，Ⅸ，Ⅹ図など色彩の多く入った図版は多くの反応を出すが，いっこうに色彩の要素は入っていない場合は，色彩はたんに視線や注目をひきつける役割しかしていない。こういうプロトコールは，情緒的には未分化で刺激をされやすい，落ちつきのない人によくみられる」とされることから，情緒的に未分化なことが推測される。

さらにsex反応＝4で，早川（1970）によれば「性的反応に固執するものは“性”そのものへの葛藤が主因である」とされる。性への葛藤については次の継列分析で詳しく見ていく。

継列分析から，Ⅰ図では最初に①「コウモリ」とほとんどP反応の見方をしているのに，黒さが勝って「黒いシルエット」のみになった。続いて②「目が4つある」と強く視線を感じて不安になったが，「仮面」と物質にすることで対処している。

Ⅱ図では，まずは赤色に目がいき，D2領域に①「蝶々」と反応した。無難に反応したものの，赤色からの刺激を無視できず，続く反応では同じD2領域に②「女性器」と性反応になった。そこから立て直し，③「祈る姿」とP反応を出している。

Ⅲ図では①「襟元」と人間部分反応となり，②「ダチョウ」，③「蟹」と動物反応が続いた。蟹は「食べてる」とoral反応になったので，捕食の攻撃性や呑み込まれ不安が喚起されていることが推測される。付加で④「おしりをくの字にしてる鳥」とほとんどP反応の認知をしているものの，人間には至らなかった。「運動を伴った人間を出す人が80%以上あるとされており，H，Mが出ない方が問題」（馬場，1999）とされることから，人間反応を妨げるほど退行状態にあったと考えられる。

Ⅳ図では①「蛙」，②「拳」となった。「威圧的な印象を与える」（馬場，1999）図版であるが，2つとも小さなものや部分にしたり，①「上から見た姿」と自分の方が上から見ているとすることで，威圧感や圧迫感を回避したと考えられる。

Ⅴ図では①「後ろから見たコウモリ」とＰ反応から始めることができた。次の反応では②「蝶々。羽の下の部分」と視点が下がった。③「魔女。後ろ姿」と黒色から魔女を連想し，④「ダンサーの足」とまた視点が足下に下がった。

Ⅵ図は most delayed card で sex shock を受けたと思われる。①「インディアン」の反応の後に②「トーテムポール」，③「携帯電話の基地局」と性的象徴と見なされる反応が続いている。抑制しきれず，付加で④「男性器」と反応した。限界吟味段階ではっきり「気持ち悪い」と述べているので，性器期的な欲求が喚起され戸惑ったことが窺える。

Ⅶ図では①「ティンカーベル」とＰに近い反応を出している。ただ，Ⅶ図以外はすべて複数反応を産出しているのに，Ⅶ図のみ１つの反応で終わっている。mother image card に挙げていることから，それ以上関わっていたくなかったのかもしれない。

Ⅷ図では①「カメレオン」とＰ反応から始まり，付加で③「おっぱい，女性器」とＦ―反応で終わっている。カラーには言及していないが，Ⅱ図同様ピンク色から性反応を連想したと思われる。１つの図版でＰ反応と性反応を出し，落差が激しいといえる。

Ⅸ図ではピンク色から①「桃」と food 反応になり，口唇期に退行している。次に②「女性器」と性反応になった。Ⅷ図の性反応を引きずり，そのショックから回復できていないと思われる。

Ⅹ図では①「犬」，②「ライオン」，③「龍」，④「鹿」と動物反応を続けて産出したが，⑥「大腸。色が」と最後は解剖反応になった。やはり赤色から内臓を連想し，形態水準を落としたと思われる。付加で立て直しを図ったものの，⑦「変な生き物」ときちんと形作るところまで回復できなかった。most liked card に選び，「色がたくさんある。心が動いた」と述べていることからその心の動きは FM といえ，衝動性をコントロールするのは難しいだろう。

2．２回目のロ・テストの量的分析および継列分析

量的分析から，「対人関係において過敏で不安をもちやすい人によく見られるとされる di 反応，統合的な性質を欠く反応とされる d 反応」（片口，1987）が見られ（di ＝ 3，d ＝ 7），対人不安や認知の統合力の弱さが考えられる。また，Ⅰ図④「胞子」，Ⅱ図⑤「モアイ像」，Ⅴ図②「ワニの口」，Ⅶ図③「指の爪」，Ⅷ図④「カメレオンの目」など，突起した領域への反応が散見され，細部へのとらわれや強迫的な一面が窺える。公共性は「Ｐ ＝ 5 あるいはそれ以上が一般的とされる」（片口，1987）ことから，Ｐ ＝ 2 は少ないといえる。「Ｐ ＜ 3 は社会的協調性の障害，極度の不安などを示す」（小野，1991）とされ，不安などで公共性が保たれていない状態にあると推測される。

対人面は，小野（1991）によれば「Ｈ％ ＝ 10 ～ 25％，Ｈ ＞（Ｈ），Ｈ ＋（Ｈ）＞ Hd ＋（Hd）ならば正常」とされており，Ｈ％ ＝ 27％はやや多く，Ｈ ＋（Ｈ）＝ 0，Hd ＋（Hd）＝ 11 で部分反応のみとなった。「Ｈの欠如は人間関係を避けようとする傾向，社会性の喪失を意味する」（片口，1987）ことから，対人関係が上手く取れず社会性は部分的になりやすいと考えられる。

そのため，転職を繰り返してきたと推測される。

「FC ＜ CF ＋ C，低い F ＋ %，ΣC ＜ 2M ならば，外的統御がきわめて悪く情緒刺激に衝動的に反応する」（小野，1991）とされており，FC：CF ＋ C ＝ 1：2，F ＋ % ＝ 39%，ΣC：2M ＝ 2.5：8 からは，情緒刺激をコントロールするのが難しい可能性が考えられる。

継列分析から，Ⅰ図の最初に，反応せずに1分近く図版を眺めるだけの時間ができた。①「色味からカラスの横顔」と黒色に反応し，次に②「狐の顔」，③「小動物の横顔」と D あるいは Dd 領域に顔反応が続き，最後は di 領域に⑤「恐竜の横顔」となった。「領域としては W が，決定因としては F が出やすい」（馬場，1999）とされるが，W 反応は1つも出なかった。また③「小動物の横顔」は「口をバーッと開けてる」と述べていることから，勢いよく口を開けた動物の投影をしており，攻撃性や飲み込まれ不安を覚えていることが推測され，di 領域に反応したことからも不安を覚えていることが推測される。

Ⅱ図では，まず D3 領域に①「good の手」と F 反応にしている。次に②「手を合わせている」と手の反応（部分反応）が続き，3つ目の反応で③「女性器とアゲハ」となった。最初は red shock は受けていないように思われたが，赤色からの刺激に耐えられず，sex 反応になったと考えられる。質問段階で女性器とアゲハはそれぞれ別の反応になったが，自由反応段階では同時に見ていた可能性が考えられる。また，D2 領域を赤ではなく「ピンク」と表現しているところから（color projection），色から受ける刺激を弱めようとしていると思われるが，認知を歪める可能性が指摘される。

Ⅲ図では，D1 領域に①「タツノオトシゴ」と反応している。Ⅱ図と同様，まず赤領域に目が行ったと思われる。4つ目の反応で④「骨盤」と解剖反応になり，濃淡に注目し「色の薄いところが薄い骨」と壊れてしまうような不安を覚えたといえる。その不安を最後の⑤「蟹の手」と硬い蟹にすることで防衛しようとしたと思われる。

Ⅳ図では，①「蛙」と初めて W 反応を出すことができた。次に di 領域に②「猿の顔」と反応した。di 領域になったので陰影図版から不安を覚えたと推測される。

Ⅴ図では①「コウモリ」とようやく P 反応を産出することができた。次の反応では②「ワニの口」と oral 反応になった。

Ⅵ図では①「男性器」から始まり，4つの反応のうち3つが sex 反応になった。③「トーテムポール」も男性器を連想させる内容のため，ほとんどⅥ図は sex shock そのものといえる。しかも，最後は di 領域に④「女性器」となった。di 領域になったことから不安を覚えていることが推測され，何も防衛できずに回復できなかったといえる。男性器も女性器も見て，最初の反応は①「男性器の中に女性器も見えちゃう」と性同一性が混乱している様子も窺える。

Ⅶ図では，①「女性の横顔」と P 反応に近い反応を出すことができているものの，続く反応では②「女性器」とⅥ図の sex shock を引きずっている。その後，③「指。爪」と硬い爪に注目していることから，Ⅲ図と同様，不安を硬いもので防衛しようという心の動きが推測される。

Ⅷ図では，①「ハンガーにかかったドレス」とテンションが感じられ，続く②「カメレオン」はP反応ではあるが，「しがみついてる」とやはり緊張感を帯びている。3つ目の反応で③「女性器」となり，Ⅷ図でもsex shockを引きずっているといえる。

Ⅸ図では，①「マジンガーZの顔」とW領域に顔反応を出した。「カードⅠ以外のブロットの全体を顔と見ることには非常に無理があり，（略）心理的に距離を取り，つまり自閉的な状態になっている」（馬場，2017）ことが考えられることから，カラー刺激に対して自閉的になってしまったことが推測される。続く反応ではdr領域に②「女性器」となった。保続していることから，見方を容易に変えられないことが推測される。

Ⅹ図では，①「微生物」から始まり，④「ひげ」と男性を思わせる反応と，⑤「ヒールの靴」と女性を思わせる反応を出している。Ⅵ図と同様，性同一性の混乱が窺える。

3. 心理療法の経過

X年5月からX＋1年5月まで，13回の面接を行った。当初は隔週のペースで会うことで合意したが，Aに病気が見つかって途中2回入院したため，計3ヵ月間面接に来られない期間があった。入退院している時期は，体調を加味して流動的な枠組みで面接を行った。

＃intで「自分で山登ったことない（決断したことない）。自分が選ぶ前に，いつも母親が選んでしまった」と語り，＃1～＃5で，どうして決断することが難しいのかを一緒に考えていった。Aは自分に自信がなく，皆から嫌われないように皆の意見を聞いて回り，結局それらの意見をまとめられずに足踏み状態になる対人関係のパターンが確認された。「自分の考えに自信を持つことと，利己的になってしまうことの違いが分からない」と述べ，他者の意見を大切にすると同時に，自分の意見を主張することが課題として挙げられた。自己主張≒口調が強い≒イライラしている≒父親≒利己的とつながっていることが浮上し，自己主張することは母親を傷つけた父親の存在に自分がなってしまうことになるため，自分の意見を通すことに抵抗があると気づいた。

それはMahler, et al.（1975）の発達論でいう「分離・個体化の失敗」から起こっていると筆者は考えた。Aは母親の枠の中で生きてきたので，友達と楽しみたいとか自分の世界をつくりたいと思っても，母親からの分離不安・見捨てられ不安から，なかなか主体性を持てずにいる。そのため，「答え合わせをしたい（答えがほしい）」と面接を希望してきたと考えられた。筆者はAが求める答えを与えるのではなく，Aが選択することを支持するようにした。選択した後に失敗だったと思っても，またそこからやり直すという経験をし，その中で落ち込んだり迷ったりする思いを筆者が受け止め，母親との関係性の時とは違う情緒的体験をしてもらうように心がけた。流動的な枠組みで面接を続けたことも，「自分で山を登ったことがない」Aが，自分で「今日は休む」と選択したことを筆者は受け入れるようにした。自分が支えてほしい時に面接に来て心のエネルギーを充電することを経験してもらい，分離・個体化が進んでいくように

接することを心がけた。

＃6でローンを組む大きな買い物をした（再発した）ことを明かした。発端は，友人からプレゼントをもらい，その紙袋がブランド物だったため，スポンサーから再発を疑われたことだった。その場でAは釈明したものの，スポンサーは自分と同じゲイで買い物依存者ということで特別な親近感（理想化）を覚えていたこともあり，一瞬でも疑われたということが許せず，自分の気持ちを分かってもらえないならと，スポンサーに反発する意味合いで買い物をした（自分の名義ではローンを組めないので，父親に代わりに契約してもらった）。筆者はその経緯を聞いて，再接近期危機が起こっているように感じた。Aはスポンサーが再発した（疑いのある）自分から離れていってしまうと不安になり，分離・個体化を進めているので自分がスポンサーから自立していきたいのに，それをスポンサーに投影したのではないかと考えた。そのような不安定な時に父親に入ってもらうことで，二者関係の不安を緩和させようとしたと考えた。

＃7～＃9で再発したことを振り返った。振り返りの中で，どうしてしてはいけないことを繰り返すのか，自分の問題点を客観的に指摘してほしいと再びロ･テスト受検を希望した。1回目の後にフィードバックしていたので，自分を変えていく方向性を示してもらえたと感じたのかもしれない。＃8の後にロ・テスト2回目を実施し，＃9でフィードバックを行った。筆者はAがカウンセリングを希望してきた時，Thのことをスポンサーのように理想化しているのではないかと感じた。ロ･テストに現われた防衛の弱さを伝えたら，Thに対しても「自分の頑張りを分かってもらえない」と反発心が出るかと心配したが，ありのままを伝えることにした。“見捨てられ不安を感じると防衛しようと頑張るが，防衛が部分的で脆いため，不安を防衛し切れていない。買い物という物を得る行為も防衛の1つとしての意味を持っていると思われる”と筆者から噛み砕いて説明した。Aは今回の再発に限らず，失敗や欠点を認めることはできるが，自分を責めて終わってしまう（次にいかせない）と言い，筆者が＜自分がどうなっていきたいかが大事だと思う＞と伝えると，「自分の考えに自信を持つことと，利己的になってしまうことの違いが分からない」と，当初と同じ疑問を口にした。

＃10～＃11は，約半年後に傷病手当が終了するため，仕事復帰について現実的な話し合いをした。Aはロ･テストの結果を踏まえ，「一般就職はまだ無理かな」と自ら判断した。公の生活自立・仕事相談センターに相談に行き，就労移行施設を紹介してもらった。Aが自ら就労移行施設を紹介してもらってきたので，筆者はその建設的な判断と行動力に驚いた。

＃12～＃13で，自分の問題とまた向き合った。Aは，父親の気持ちが離れてしまった母親を不憫に思い，常に母親の味方に立つことで母親を支えようとした。その母親との関係性が生きづらさの元凶になったのは，他者（母親）と違う意見を持つと，他者を傷つけてしまうと恐れることが染みついたためと気づいた。

まだ課題は残っているものの，対人関係のパターンを認識し，失敗しても前に進んでいきたいという意欲が出てきたため，＃13で終結し，就労移行施設に通うことにした。Aはその後も

度々連絡をくれ，X＋1年11月に就職活動を始め，X＋2年1月に一般就職した。迷いや愚痴は口にしても，もう答えを筆者に求めてくることはなかった。

Ⅳ．考察

本事例はゲイであることを同世代の友達に受け入れてもらえず，小学生の頃から文房具という物を媒介にして友達との関係を何とか保つという方法を身に着けてきた。また，家庭環境から母親と依存関係にあり，父親の不在で二者関係から三者関係に広がっていきにくい中で育ってきたというものである。

20代後半から30代前半で母子関係や買い物の仕方が病的ではないかと自覚し，自ら生きづらさの問題解決のために医療機関やDA，施設のサポートを受けたいと積極的に行動に移してきた。Aは再接近期危機が指摘されたので，Kernberg（1975）の境界性人格構造を持っていると考えられたが，上述のように自発的に改善しようとしているので，「分裂していない自我の側面を持っている」（馬場，2016）ことが窺えた。それは自転車操業の経済状況になっても何とか働いて生活をつないだり，対人トラブルから仕事が続けられなくなっても何度も転職を試みたりしてきた経緯からも窺えた。

2回のロ・テストは，異なった状況を背景になされた。1回目の場合は，約半年間症状がなくDAとの仲間関係も安定した後，「買い物依存の原因を明らかにしたい」と来談し，落ち着いた中で自己を対象化しようとした。2回目の場合は，「客観視したい」という思いはあるものの，スポンサーから再発を疑われるという見捨てられ体験に応じて買い物依存が再発し，何とかしたいという内から生じる衝動に駆り立てられた状態にあったといえる。このように状況の異なる中で，1回目には防衛機能によって前面化していなかった病理が，2回目には防衛機能の混乱によって前面化しているプロトコルが得られた。特有な状況の中で得られた特徴的な2回のロ・テスト反応を比較考察することで，防衛の奥にある事例の核心的な病理の様態，および見捨てられ体験との関連から病理発生のメカニズムを明らかにしていく。

また，買い物依存とゲイのロ・テスト研究は少ないので，本事例研究によって買い物依存やゲイの背景，さらには両者の合併の背景になり得る要因についても検討してみたい。

1．1回目のロ・テストの考察

量的分析で触れたF∓反応は後半で増加している（Ⅰ～Ⅴ図＝3つ，Ⅵ～Ⅹ図＝8つ）。Ⅵ図では②「トーテムポール」，③「携帯電話の基地局」とArch反応が2つ見られ，それらはsex反応を想起させる反応内容といえ，④「男性器」と合わせて3つのF∓，性的な反応を示したといえる。Ⅷ～Ⅹ図では色彩反応はあまり出せず（FC＝1.5，CF＝1），5つのF∓反応が見られた。これらのことから，多彩色刺激やsexを連想させる突起や割れ目といった情緒刺激を

受けた時，その刺激によって生じた衝撃を意識的に統制し，形態水準の良い反応を形成することが困難と考えられた。反対に言えば，前半はred shockを受けても立て直せたり，刺激が弱ければ適応的に対処できる力があるといえる。

Ⅴ図では①「羽を広げたコウモリの後ろ姿（W）」，②「蝶々の羽の下の部分（dr）」，③「マントを広げた魔女の後ろ姿（W）」，④「ブルマをはいたダンサーの足（d）。内股」という4つの反応が見られた。このような反応から，対象を背後から離れて見るような動きから，部分的な対象へ視線が接近していくような動きへと移る流れが繰り返されていると考えられた（Ⅴ図①→②，③→④）。そして，③「マント～」→④「ブルマ～」の反応の流れには女性的な要素が入り込んでいる。このように翼状構造に圧倒され，置き去りにされるような体験と下から覗き込むように近づく体験，そこに魔女から連想される否定的な母親性と内股・ブルマから連想される少女性という要素が含まれ，揺れ動いていると考えられた。続くⅥ図では②「トーテムポール」，③「携帯電話の基地局」，④「男性器」と，男根的な動きが見られた。Ⅶ図①「高飛車なティンカーベル」は，Ⅴ図で母親に圧倒され少女に接近していく動きとは対照的に少女と張り合うかのような動きが見られ，Ⅷ図③「おっぱい」，Ⅸ図①「桃」，②「女性器」と女性を連想する部分対象への接近が見られた。また，Ⅸ図①「桃」からは口唇欲求，Ⅲ図③「蟹が食べてるところ」というoral反応からは，呑み込まれるような不安が考えられた。これらのことから，女性に融合するような動き，対象との融合への希求，それゆえ圧倒され呑み込まれるような不安，見捨てられるような不安が生じ，その不安の反動形成で男根的な動きが生じるという一連の流れが考えられた。この一連の流れはMahler, et al.（1975）の再接近期の特徴と一致するといえる。

2．2回目のロ・テストの考察

1回目と同様，F∓（F－）反応は後半で増加している（Ⅰ～Ⅴ図＝4つ，Ⅵ～Ⅹ図＝10）。Ⅵ図では①「男性器の中に女性器の断面図も見えちゃう」，②「男性器」，③「トーテムポール」，④「女性器」と4つのF∓，性的な反応が見られた。Ⅷ～Ⅹ図では色彩反応はあまり出せず（FC＝1，CF＝1），6つのF∓反応が見られた。これらのことから，色彩刺激や情緒刺激に圧倒され，1回目の量的分析のところで解釈したように，Fという形態をシンプルに捉えることが難しいと考えられた。

次に，Ⅱ図⑥「忍者が2人。首から上はない」，Ⅲ図②「上半身」，Ⅶ図①「女性の横顔」と部分反応になりP反応に至らない反応が度々見られたことから，全体対象になりにくいことが考えられた。量的分析でも指摘したように，未熟な対人関係になりやすいといえる。

Ⅰ図では反応を言語化せず，約1分間図版を見て伏せるという行動が見られ，緊張感や自閉的な態度が窺えた。自ら再受検を希望したとはいえ，どのような結果が出るか緊張していたのではないかと思われた。そしてⅠ図①「カラスの横顔」から始まり，③「口をバーッと開けて

いる小動物の横顔」，⑤ di 領域に「恐竜の横顔」という反応が見られた。このような反応から，見捨てられるような不安や（①），一体化の希求と同時に呑み込まれるような不安を感じ（③），それらの不安感が増幅して最終的に「恐竜」という大きくて怖いものになってしまった（⑤）と考えられた。Ⅱ図ではⅠ図の恐怖心を引きずり，Ⅱ図①「親指」，②「手」という部分的な対象へ視線を接近させた。Ⅱ図③「女性器」，④「上から見たアゲハ」，Ⅴ図②「ワニの口」，③「上から見たアゲハ」，Ⅶ図①「女性の横顔」，②「足広げちゃって女性器（が見える）」という反応からは，距離の近い部分的な視線から，上昇して距離を取ろうとする動き（Ⅱ図③→④，Ⅴ図②→③），離れて見るような動きから，吸い込まれるように視線が近づくような動き（Ⅶ図①→②）が読み取れた。そして，Ⅶ図③「指の爪」という硬い反応は，そうした揺れ動きに対する防衛と考えられた。他にも，Ⅹ図①「海で浮遊してる微生物」，②「エビとか蟹の顔」，Ⅲ図④ cF 反応で「骨盤」，⑤「蟹の手」という反応から，呑み込まれる不安や依存欲求を骨盤や甲殻類という硬いもので防衛していると考えられた。ただ，その防衛は「指の爪」や「蟹の顔」や「蟹の手」という部分対象のため，脆いものであると考えられた。さらに，1回目と同様，Ⅵ図では男根的な反応内容での反動形成が見られるが（①，②，③），①「男性器の中に女性器の断面図も見えちゃう」，④ di 領域に「女性器」を見ており，2回目は性同一性の混乱が見られた。これは，Tuber & Coates（1989）の「性同一性の混乱ぶりが反応にはっきりと出ており，その中で性別の知覚は動揺し，男性と女性の身体的な特徴が一つの反応の中で無造作に結合していた」という報告と一致する。また，Ⅷ図①「ドレス」，Ⅸ図②「女性器」，Ⅹ図⑤「ヒールの靴」と女性を連想する部分対象への接近が見られるものの，Ⅹ図では④「ひげ」，⑤「ヒールの靴」という男性と女性をそれぞれ連想させる反応が見られ，常に防衛が脅かされている状態と考えられた。これらのことから，対象と溶け込むような関係への希求，同時に呑み込まれるような不安を体験し，その防衛として反動形成や部分化が生じる。しかし，その防衛は常に脅かされているため，目の前の部分的な対象との融合関係を求めるという一連の流れが考えられた。この一連の流れは Kernberg（1975）の第2段階（x 5）と一致するといえる。つまり，自己対象と対象表象が分化していない段階に戻っているといえ，自我の弱さから一次過程思考に退行したと考えられた。

3. 2回のロ・テストの比較と心理療法から

1回目と2回目のロ・テストを比較すると，2回目では W％減少，Dd％増加，P 反応減少，sex 反応増加となった。2回目で W 反応・P 反応が見られなくなったⅠ・Ⅱ・Ⅶ図のうち，Ⅰ図では「横顔」が，Ⅱ図では Cp 反応が，Ⅶ図では「横顔」と sex 反応が見られるようになった。これらのことから，刺激に気持ちが乱されなければ全体反応を出すことができるが，気持ちが乱されると対象表象が障害されてしまうと考えられた。

sex 反応の増加については，Reich（1933）によれば「他の男性に対して，男性対男性として

の競争心や敵意を放棄し，同性愛的，女性的，依存的態度によって反動形成する」とされることから，自分の再発を疑ったスポンサーへの反応と推測される。Ⅵ図では性同一性の混乱が見られたことから，反動形成が崩れてゲイの関係性が揺らいだ時，Aの場合は自分が女性なのか男性なのか分からなくなったり，女性への一体化の希求が出たりすることを示していると考えられた。

他にもゲイに関して，重野（1970）は「幼い時期において母親との間に強い結びつきを経験しているものが多い」，Lerner（1998）は「対象関係は未発達な水準にとどまっている」，渡辺（1997）は「心の病気の発症や再発のきっかけに性別同一性が深く関わっている」など様々に指摘しており，これらのゲイの特徴がAにも多く当てはまるといえる。生育歴の中で，幼少期から母親を情緒面で支える役割を担ったことで分離・個体化が上手くできず，父親が物理的・心理的に不在だったことで男性性の取り込みが上手くできなかったことなどが，ゲイの特徴とアディクション問題を抱えるようになったことと大きく影響していると推測された。

2回のロ･テストから，対象への融合，呑み込まれる不安，見捨てられ不安，部分化による対応，同性愛関係の中での性同一性の安定化が共通しているといえる。それらのパーソナリティの基本構造を共通に示しながら，同時に状況への反応の違いも示していた。2回目のロ･テストには，性同一性の混乱や，部分的な認知がより主観的かつ強迫的になっていることが現われていた。このことから，同性愛的な関係が破綻すると，見捨てられ不安が喚起され，性同一性が混乱し，それらを防衛するために部分的な対象との融合関係への没入が生じ，それが買い物依存という物との部分的関係への融合の引き金になることが考えられた。Lerner（1998）の研究で「性的倒錯行動や態度を示す男性は，成人にしろ児童にしろ，境界性人格構造をもっていることが強く示唆された」ように，Aの問題は対象と溶け込むような関係への希求，それゆえ生じる対象に呑み込まれる不安，見捨てられ不安にあり，それらへの防衛として部分化による対応，同性愛などが生じる。しかし，その防衛は常に脅かされているため，同一性が揺らぎ，その不安定さから逃れるために，目の前の部分的な対象との融合関係へ没入してしまう。この一連の流れが，物との一体化としての買い物依存である可能性が示唆された。

これらの心の動きは心理療法の中でも見られた。自分の意見を通すことに課題を抱えていたAは，男性性の獲得や分離・個体化の過程に取り組んでいた。子どもの頃から嫌っていた父親と今も同居しているのは，男性性の取り込みのために必要なことだと考えられた。スポンサーに再発を疑われたことで見捨てられ不安を抱き，一気に問題行動化してしまったことについて，渡辺（1997）によれば「買い物は生活を豊かにするためでなく，耐えがたい感情や考え，葛藤を解消しようとするための手段」とされることから，見捨てられ不安への防衛として物を買う（取得する）という行為に及んだといえる。それは「欲求を満たすためにのみ考えている（略）一次過程思考」（馬場，2016）に退行したためと考えられた。その際，父親にローンを組んでもらったことは部分対象の自分の不安定さを補完してくれる意味を持つと思われた。

4. まとめと今後の課題

物質使用障害の治療において，生きる上での困難な問題を抱えた者が，その問題の解消にアディクションを使用している場合，「治療の際にパーソナリティ特性を理解する必要性がある」（清島・古賀，2016）と指摘されている。筆者は，買い物依存で苦しんでいる者に対しても人格特性の理解は重要ではないかと考え，本稿では特有な状況の中で得られた特徴的な2回のロ・テスト反応を比較考察することで，買い物依存者の人格特性について検討した。また，本事例は買い物依存とゲイという2つの特徴を同時に有しているため，買い物依存やゲイの背景，さらには両者の合併の背景になり得る要因についても検討した。

その結果，Aの問題として対象との融合や呑み込まれる不安，見捨てられ不安があり，それらの防衛として部分化が使われ，同性愛などが生じた。しかし，その防衛は常に脅かされているため，自分が何者なのか分からなくなり，それから逃れるために目の前の部分的な対象との融合関係へ没入した。つまり，分離以前の溶け込み，呑み込まれるような不安の中で生きていると考えられ，このような心性が買い物依存者の生きづらさの1つにあることが示唆された。

本稿は一事例研究であるため，今後は事例数を増やし，今回得られた買い物依存者の心理的・力動的特徴を検討していきたい。

〔注〕

(1) 有効性が証明されている心理社会的治療には，動機づけ面接強化療法，認知行動療法などがある。

(2) 同性愛者（homosexual）という言葉は，同性愛が異常であるという前提に基づいていた一昔前の時代の研究において使用されてきたため（石丸，2008），本稿では近年使われているゲイという用語を用いる。

(3) DSM-5の段階では「セックス依存，運動依存，買い物依存などは，精神疾患としての行動異常と認めるには十分なエビデンスがない」（和久田，2014）とされており，非物質関連障害群の診断は受けていない。

(4) self help groupの中での相談相手のこと。先行く仲間に相談し，助言や提案をもらったりする（西田，2005）。

(5) Kernbergは第1段階が正常な自閉，第2段階が正常な共生関係，第3段階が自己表象の対象表象からの分化（境界性人格構造），第4段階が自己表象と対象表象の統合，第5段階が超自我の固定と自我の統合に発達段階を分けた。

〔引用文献〕

American Psychiatric Association (2013), *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders DSM-5.* Washington DC, [高橋三郎・大野裕監訳（2014), DSM-5 − 精神疾患の診断・統計マニュアル，医学書院 .]

馬場禮子（1999), 改訂　ロールシャッハ法と精神分析―継起分析入門 , 岩崎学術出版社 .

馬場禮子（2016), 改訂　精神分析的人格理論の基礎―心理療法を始める前に―, 岩崎学術出版社 .

馬場禮子（2017), 力動的心理査定―ロールシャッハ法の継起分析を中心に , 岩崎学術出版社 .

船橋新太郎・帚木蓬生・谷岡一郎ほか（2011), 依存学ことはじめ − はまる人生，はまりすぎない人生，人

生の楽しみ方－, 晃洋書房 .
橋本望（2019), 物質依存と行動嗜癖に共通する治療指針と相違点 , こころの科学 205, 84-89.
早川幸夫（1970), 性的機能障害者の性格像の分析 , 片口安史・岡野命・岡部祥平（1970), ロールシャッハ法による事例研究 , 誠信書房 .
廣中直行（2013), 依存症のすべて－「やめられない気持ち」はどこから来る？ , 講談社 .
石丸径一郎（2008), シリーズ･臨床心理学研究の最前線①同性愛者における他者からの拒絶と受容―ダイアリー法と質問紙によるマルチメソッド・アプローチ―, ミネルヴァ書房 .
片口安史（1987), 新・心理診断法－ロールシャッハ・テストの解説と研究 , 金子書房 .
Kernberg, Otto F.（1975), *Borderline conditions and pathological narcissism*, Jason Aronson.
Khantzian, Edward J. & Albanese, Mark J.（2008), *Understanding Addiction as Self Medication － Finding Hope Behind the Pain*. Rowman&Littlefield Publishers, 松本俊彦訳（2013), 人はなぜ依存症になるのか－自己治療としてのアディクション , 星和書店 .
清島恵・古賀聡（2016), アルコール使用障害の疾病概念の変遷とロールシャッハ・テスト研究 , 九州大学心理学研究第 17 巻 , 53-61.
小林桜児（2016), 人を信じられない病－信頼障害としてのアディクション , 日本評論社 .
Lerner, Paul M.（1998), *Psychoanalytic Perspectives on the Rorschach*. Hillsdale, New Jersey, 溝口純二・菊池道子監訳（2003), ロールシャッハ法と精神分析的視点（下）臨床研究編 , 金剛出版 .
Mahler, Margaret S., Pine, Fred., Bergman, Anni.（1975), *The psychological birth of the human infant : symbiosis and individuation*, Hutchinson, 高橋雅士・織田正美・浜畑紀訳（1981), 乳幼児の心理的誕生―母子共生と個体化 , 黎明書房 .
本明寛（1959), ロールシャッハ・テスト　人格診断法 , 金子書房 .
西田隆男（2005),「JUST FOR TODAY（今日 1 日）」Ⅱ―薬物依存症からの回復―, 東京ダルク支援センター .
小野和雄（1991), ロールシャッハ・テスト , 川島書店 .
Reich, W.（1993), *Charakter analyse*, Selbstverlag, Wien, 小此木啓吾訳（1964), 性格分析 , 岩崎学術出版社
重野晴子（1970), 男子同性愛症者における性反応の意味　片口安史・岡野命・岡部祥平（1970), ロールシャッハ法による事例研究 , 誠信書房 .
Tuber, Steven. & Coates, Susan.(1989), *Indices of psychopathology in the Rorschachs of boys with severe gender identity disorder*. Journal of Personality Assessment, 57, 100-112.
上芝功博（2007), 改訂増補　臨床ロールシャッハ解釈の実際 , 悠書館 .
和久田智靖（2014), Ⅴ. 物質関連および嗜癖障害 , 森則夫・杉山登志郎・岩田泰秀編著（2014), 臨床家のための DSM-5 －虎の巻 , 日本評論社 .
渡辺登（1997),「依存」する心理 , 日本実業出版社 .

〔付記〕

本稿の作成にあたり，ご指導いただきました松瀬喜治先生，投稿を快諾してくださった A さん，本研究にご協力いただいた皆様に心より御礼申し上げます。

（とみた　あい　教育学研究科臨床心理学専攻修士課程 / 修了）
（指導教員：松瀬　喜治 教授）
2022 年 9 月 13 日受理